高等教育研究センター
かわらばん
夏号
名古屋大学
高等教育研究センター
ニューズレター第31号

教育と研究の関係をどのように考えるか

研究一流なら教育一流？

すぐれた研究者はすぐれた教育者なのか、学内で何度か話題になったことがあります。具体的な教員名も飛び交い、議論は白熱しました。

ある教員からは「研究能力は大学で教えるための前提条件である」という意見が出されました。また、「できる人はどのような活動でもよくできる」という声もありました。これらは「すぐれた研究者はすぐれた教育者である」とする見方です。

一方、「教育に時間を注げば研究の時間が失われる」という問題や、「教育には常識が必要だが、研究には常識を超えることが必要だから、両者は全くの別物」といった性質上の違いを指摘する意見もありました。これらは「教育と研究の葛藤」を前提として「すぐれた研究者がすぐれた教育者とは限らない」という見方を示す意見だといえます。

実証研究の知見

「大学の教育と研究の間にはいかなる関係があるか」という問いは、高等教育研究の対象にもなってきました。国内外の多数の実証研究の成果によれば、教育能力と研究能力の間に弱い正の相関がある、弱い負の相関がある、両者に相関がない、という3種類の分析結果があります。つまり、すぐれた研究者はすぐれた教育者になるかもしれないし、ならないかもしれないし、関係ないかもしれないということになります。

明確な結論が得られていない状況に、ある種の気持ち悪さを感じる方もいるかもしれません。しかし、設定した問いによっては普遍的な答えが得られない場合があるのはやむをえません。この問いの場合であれば、教育能力や研究能力をどのように数値化するか、対象とする教員をどのように選ぶのか、教育能力および研究能力以外の要因の影響を統計上どのように取り除くのかなどによって、結論が異なる可能性があるのです。

ただし、研究が蓄積されてきているなかで明らかになってきたこともあります。たとえば、学問分野による違いです。社会科学分野の教員は自然科学や人文学の分野の教員よりも教育能力と研究能力の相関が高い傾向にあることが指摘されています。

教育と研究をつなぐ

近年は、「教育と研究をどのようにつなげるか」についての研究が進んでいます。教育と研究の関係を静的に分析するのではなく、教育と研究の関連性を高めるための方策を明らかにしようとする実践的な研究です。

このような研究は、イギリスやオーストラリアでは、研究的要素を学士課程教育に導入するよう促進する政策と並行しています。これまでの実験や演習などに限らず、様々な教育活動において研究の要素を効果的に取り入れ、教育と研究の関連性を高めようとする取り組みです。

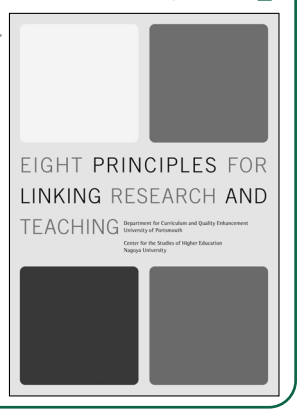
研究大学を自負している名古屋大学にとって、教育活動と研究活動の関係をきちんと整理していくことは重要です。その際には、「教育と研究をどのようにつなげるか」という問いから議論を始めてみてはいかがでしょうか。

高等教育研究センターは、ポーツマス大学との共同研究により、このテーマに関する小冊子を刊行しました。現在は短い英語版のみですが、大学の構成員が議論を深めていくきっかけになればと思っています。

（中井俊樹）

『研究と教育をつなぐ８つの提案』

高等教育研究センターは、ポーツマス大学教育開発室との共同により、英語版小冊子『研究と教育をつなぐ８つの提案』を刊行しました。ご入用の方はセンター宛（e-mail: info@cshe.nagoya-u.ac.jp，内線5696）ご連絡ください。ウェブサイトからも入手できます。



かわらばんへの皆さまのご意見・ご感想を裏面のEメールアドレスまでお寄せください

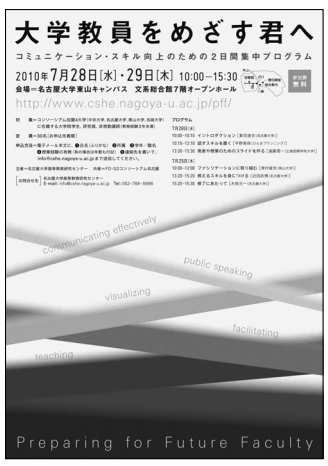
「大学教員をめざす君へ」

コミュニケーション・スキル向上のための２日間集中プログラムを開催します

高等教育研究センターでは、附属図書館のご協力のもと、本年７月28日（水）・29日（木）に大学教員をめざす大学院生やポスドクのためのプログラムを開催いたします。対象は大学院学生、研究員、または非常勤講師（教育経験３年未満）です。

今年度はコミュニケーション・スキルの向上に焦点を絞りました。話す、スライドなどの資料を作る、教える、ファシリテーションをする、という４つのセッションを予定しています。

ご関心のありそうな大学院生やポスドク・非常勤講師の方がお近くにいらっしゃいましたら、ぜひご案内ください。お申込〆切は2010年７月26日（月）正午です。詳細は学内掲示ポスターまたはウェブサイト（http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/pff/）にてご確認ください。



本プログラムはFD・SDコンソーシアム名古屋の事業です。

あなたの目で、アメリカの大学改革最前線を見てみませんか？

高等教育研究センターでは海外研修への参加希望者を募集しています。本年度の研修先は、11月３日～７日に米国セントルイスで開催される、大学改革に関わる教職員のためのカンファレンス（2010 POD Network Conference）です。

この研修はFD・SDコンソーシアム名古屋の事業で、中京大学、南山大学、名城大学からの参加者とともに渡米します。これまでの参加者からは、他大学教職員との交流が刺激になった、日本におけるFD・SDを見つめ直すよい機会だった、といった感想が寄せられています。

今年度も熱意ある方のご応募をお待ちしています。

募集人員：教職員若干名
（応募者多数の場合は、個別面談等を行うことがあります）
応募方法：電子メール本文に、氏名・所属・研修への参加動機（400字程度）・内線番号・電子メールアドレスの５項目を記して、info@cshe.nagoya-u.ac.jp までお送りください。
応募締切：2010年７月30日（金）正午
お問合せ：センター事務室（内線5696, 電子メール info@cshe.nagoya-u.ac.jp）

1）コンソーシアム事業より旅費支給。米国の大学もしくは関連機関への訪問調査のために米国滞在を数日間延長することも可能です。
2）研修終了後には報告書をご提出いただきます。

募集要項ウェブサイト　http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/pod2010/
POD Networkウェブサイト　http://www.podnetwork.org/

NUPACEの経験を大学全体に活かそう

名古屋大学では1996年に「短期交換留学受入れプログラム」（Nagoya University Program for Academic Exchange：略称NUPACE）をスタートし、これまで年間50人ペースで24の国や地域から800人を超える留学生を受入れてきました（2010年3月現在）。このプログラムは留学生センターに設置され、授業は基本的に英語によって行われています。英語による授業を組織的に行ってきたという点で、学内では国際開発研究科に次ぐ草分け的な存在です。

短期留学とは、主として大学間交流協定に基づいて母国の大学に在籍しながら、他国の大学で学習、異文化体験、語学の習得などをめざす仕組みです。短期留学では半年から1年程度の滞在期間中に異文化理解や語学の習得を行うことを目的とし、必ずしも留学先での学位取得を必要としません。

NUPACEの特徴はアジア地域以外からの留学生が多いことです。留学生センターのデータをみると、アメリカ（176人）からの受け入れが最も多く、ヨーロッパ諸国からも合計188人を受入れています。また、それぞれの国のトップクラスの大学に在籍している学生が多く、彼らの多くは高い基礎学力と学習意欲を備えています。

NUPACEではさまざまな課題が明らかになりました。学生は母国の大学と同水準の授業を本学にも期待するので、日本でよくみられる一方的な講義形態に対して厳しい評価を下すことも少なくないようです。また、日本では英語による授業を担当する教員に大きな負担を強いてきたのも事実です。大学全体で支援や動機づけを行わないと、結果的に英語による授業はなかなか普及しないでしょう。

これまで短期留学プログラムは日本の大学において、いわば江戸時代の「出島」のように位置づけられてきました。大多数の日本の大学の教員・学生の大半は、短期留学プログラムと接点を持つことはありませんでした。日本の大学を真に国際化するならば、「出島」が培ってきた経験に目を向けてみてはどうでしょうか。名古屋大学を世界のNagoya University へと成長させる上でも、NUPACEが15年にわたって語ってきたノウハウには学ぶところが大きいと思います。（近田政博）

Higher Education Glossary
高等教育にまつわる用語集

ライティングセンター
Writing Center

欧米諸国では、文章作成を支援する場としてライティングセンター（以下、センター）を設けている大学が数多くあります。センターによる支援の動きは韓国やシンガポールなどにも拡大しており、それぞれの状況に応じた活動を行っています。ただし、各国のセンターに共通する特徴として、活動の目的を文章の修正ではなく、自立した書き手の育成としている点が挙げられます。

センターで来訪者に対応するのは、多くの場合、大学院生のチューターです。チューターは専門家や指導者としてではなく、一人の読み手として来訪者に接します。面談において様々な問いかけを行うことで来訪者の思考を促し、書き手自身が文章の修正の仕方や今後の方向性を見出していく支援をします。チューターはこうした活動以外にも、学期の開始時に研修を行ったり毎週ミーティングを行ったりしており、チューター自身の文章作成力も向上するといわれています。

アメリカのセンターの場合、学生のみではなく教員がセンターを訪れ面談を受けることも珍しくありません。センターは文章作成法の教育の場ではなく、読み手とのやり取りを通して書き手がより良い文章を書けるよう支援する場だからです。こうしたことの背景には、文章作成とは個人的な作業ではなく、他者からの指摘を受けて考え直し、書き直しを繰り返してより良い文章を練り上げていく協同的な作業だとする考え方があります。そのため、様々な立場の人がコメントを求めてセンターを活用しますし、図書館など利用しやすい場所にセンターが設置される場合が多く見られます。

日本の大学では、文章作成の方法に関する科目の設置は拡大しているものの、センターの設置はまだ多くありません。両者は異なったアプローチをとっていますが、目的に応じた設計が必要という点は共通しています。ライティングセンターの役割は、それぞれの大学によって異なってくるのです。（伊藤奈賀子）

読んでおきたいこの1冊
Great Books on University

『図書館に訊け！』
井上真琴　著　　ちくま新書　2004年

大学図書館が、本が沢山しまってあって貸してくれるところ、あるいは試験前に勉強するところと考えているとしたら、ちょっとどころか、かなりもったいない。だれもが知っているようでいて、だれも知らない未知の世界が図書館なのである。歴史的に見れば、大学という制度が成立するずっと前から図書館は存在していた。附属図書館とはいうけれど、本当は図書館に大学がくっついている。こんな見方も可能だ。

図書館とは、セレクトされ体系化された情報の集まりである。知りたい情報を提供してくれるのに加えて、何を知ることができるか、知らないといけないかも教えてくれる。在学中に図書館を使いこなせるようになること。これは、学習や研究を進めるために役立つだけでなく、社会に出てからこそ必要となる、ずっと成長できる力、つまり自分で学び考える力を養ってくれる。

実はこんなことを言っている私自身、図書館を使いこなせているなどという感覚は、まったくない。せいぜい片隅のごく小さな範囲を、ちょろちょろとうろついている程度である。まずは図書館という世界の旅行案内のような本を読んで、その広がりや特徴を知っておきたい。いろいろな本が刊行されているが、ここでは最近読んで面白かったものを挙げておく。学生たちにも、そして何よりも教職員の方々に読んでほしいと思う。（木俣元一）

高等教育研究センタースタッフ（2010年7月現在）

センター長　木俣元一
専門領域：西洋中世美術史

教授　夏目達也
専門領域：高等教育学、技術・職業教育論

准教授　近田政博
専門領域：比較高等教育学、学習支援

准教授　中井俊樹
専門領域：大学教授法、高等教育マネジメント

助教　齋藤芳子
専門領域：科学技術社会論

研究員　伊藤奈賀子
専門領域：高等教育学、アカデミックライティング

西原志保
専門領域：日本語表現、文学教育、日本古典文学

＜平成22年度　客員＞
陳　向明　（中国・北京大学）
キャサリン・マナトゥンガ　（オーストラリア・クイーンズランド大学）
羽田貴史　（東北大学）
飯吉弘子　（大阪市立大学）
福留東土　（広島大学）

名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601　名古屋市千種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695

E-mail　info@cshe.nagoya-u.ac.jp
URL　http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/

『かわらばん』名古屋大学高等教育研究センター　ニューズレター夏号（第31号）2010年7月発行
編集長　木俣 元一　編集幹事　齋藤 芳子